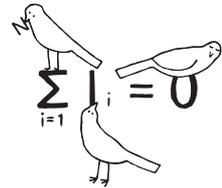




特別 Column



お大師様を訪ねて (4) 君のひとみは 10000 ボルト

高等教育機能開発総合センター 小笠原正明教授は「大学におけるリメディアル教育についての趨勢を見ると、今や必要かどうかを議論している段階ではなく、何をどのような形で誰が行うかを考える段階にあります（荒井，1995）。この問題を考えるときに、東京大学の初習物理の教育の経験はたいへん参考になるでしょう。たとえば高校における物理教育は、微分・積分を使ってはいけないなどの制約があることから、一部に不自然なところがあります。それに対して大学の物理教育においてはこのような制約が比較的少ない上に、受験対策に時間をとられる必要も無いので、もっと自由で本質的な授業がていねいにできるという利点があります。」¹⁾と高等教育ジャーナルに書かれている。

微積を使わない物理が世の中にあったとは驚きだがさらなる驚きは「大学の物理教育においてはこのような制約が比較的少ない」という件である。これは一体何を意味するのであろうか。もしかすると日本の大学の多くは高等教育をできる環境にないのかもしれない。ある私立大学で非常勤講師として電気工学科の学生に電気回路を教えることになったメーカ出身の友人が最初の授業で高校物理の理解度を確認するためにキルヒホッフの法則を使って解く簡単な試験問題をやらせたら、2人しかできなかった。茫然自失とはこのことであったとは友人の言だが、その話を聞いた当該大学の学部長は、「良かったー、2名もできたのがいた、驚くべきことである。0であってもおかしくはない」と言うのであった。この学部長も元はメーカに勤務していたのだが、世の中の常識が大学の非常識であることは日常であり、今や驚きをはるかに超えて諦観の域に達しているようだ。たとえば「壁のコンセントは何ボルトか」と問うと、「5ボルトかなー」と恐るべき答えが返ってくるので、この大学が工科大単科大学であること自体が間違っているとの認識を新たにするのであるが、それを言ってしまうと自分の生きる術を失うことになるので、ならぬ堪忍するが堪忍と言ひ聞かせる毎日で、それでも救われることがあるのは、分数ができない学生を入試で落としたり他大学の工学部に入學したと聞き、下には下があるものだと感心したときだそうだ。要するに大学の現状はマーラー交響曲第6番「悲劇的」なのである。これまで大学というものにエリート意識に近いある種の期待感のような固定的な観念を持っていたが、企業のプログラムとして40年近くを過ごす大学全入時代という途方もない時代が到来していることにも気付かずはたまたそれがどのような結果を生み出しているかにはとんと縁のない世界であった。

参考文献

- 1) 小笠原正明：リメディアル教育の動向，高等教育ジャーナル(北大)，No.1, pp.54-56 (1996), <http://socyo.high.hokudai.ac.jp/Journal/J1PDF/No0115.pdf>

湖東俊彦（日本信頼性学会）